

令和4年度 学校総体兼高校総体埼玉県予選 大会総評

報告者：高体連技術部員 熊谷高校 田淵常夫

大会形式

ノックアウト方式で、6月4日(土)、5日(日)、11日(土)、12日(日)、15日(水)、19日(日)の6日間にわたって、1回戦から準々決勝までは学校会場、準決勝および決勝はNACK5スタジアム大宮にて開催された。プリンス関東1部2校、県1部9校、県2部15校、および支部代表20校(東5、西6、南6、北3)の計46校が参加し、県代表1校の枠を得るため競い合った。プリンス所属の昌平、西武台と関東大会出場の正智深谷、武南は11日(土)の3回戦から、関東予選ベスト8の6校は5日(日)の2回戦から出場した。試合時間は80分で前半と後半にそれぞれ飲水タイムが1度ずつ設けられた。試合が決しない場合は、20分の延長戦、それでも決まらない場合はPK方式によって勝敗をつけた。登録選手30名のうち、試合には22名をエントリーし、交代要員11名のうち5名まで交代が認められた。土日の連戦が2週続き、準々決勝から中2日で準決勝、さらに中3日で決勝というスケジュールに加えて、気温が真夏並みに高い日もあり、勝ち抜くにはタフさと試合運びの賢さが求められた大会となった。試合会場は、1回戦の半数の試合以外は、天然芝または人工芝ピッチという環境で行うことができた。コロナ禍ということもあり、感染症拡大防止対策を徹底しての開催となった。運営本部、審判員、試合会場校、出場チームおよび関係者、さまざまな人の努力によって大会は運営された。昌平高校が3大会ぶり4回目の出場を決めて大会は閉幕した。

大会の傾向

シーズン前半の締めくくりの時期となる大会で、各チームとも主力選手の適性を活かしながら対戦相手とのパワーバランスを考えた戦術を試しているようであった。ノックアウト方式の大会で試合時間が90分のリーグと異なり、80分ゲームということもあるのか攻撃においてはダイレクトプレーが目立った。そのような傾向があるので、GK、CB、CMFを中心とした中央の守備が安定しているチームが勝ち上がった。攻守において、個人の技術・戦術の質の違いが際立って見えた。

ベスト4のチームは、プリンス所属の2校、昌平、西武台と県1部所属の2校、成徳深谷、武蔵越生であり、ベスト8は、県1部の3校、細田学園、正智深谷、立教新座と県2部の1校、狭山ヶ丘であった。ベスト16を見るとプリンス2校、県1・2部13校で支部からの勝ち上がりは川口北の1校であった。上位に進出したチームはセカンドチームも上位カテゴリーのリーグに所属し公式戦を行っている。選手層の厚みを作ることで、日常のトレーニング強度を高めることに繋がっているのではないだろうか。また、各高校単位で複数のチームを編成することで、真剣勝負の場を経験する指導者の養成にも繋がっていると思われる。今大会では、特に、成徳深谷や西武台などは試合中において、複数のコーチが連携を取りながら、コーチングしている様子が印象的だった。

今大会ベスト4

武蔵越生は、1-4-3-1-2という変則的な3トップの配置をとる。守備は、GK関根を中心に4人のDFと3人のMFでコンパクトな陣形からサイドに誘導しボールを中心としたディフェンスでボール奪取を狙う。奪ったボールは中央の前線に預け、3トップは、相手ディフェンスのポジショニングに応じて、

3人横並びであったり、2トップ+トップ下のような形で厚みを持たせたりして、ボールを前進させていた。GK 関根のディフェンス能力が高く、プレーエリアも広いので、DFはミドルゾーンではハイラインを保てるし、ディフェンディングゾーンでも思い切りの良い守備ができていた。また、MF 佐藤はポジショニングがよく切り替えの局面も含めてカバーリング能力に長けているし、MF 吉田は人並み外れた運動量を持っており、献身的にプレーできるので、MFが3人でスペースをカバーすることを可能にしている。FW 黒澤は相手DFとMFの間のライン間のスペースで相手DFを惑わすポジションをとって攻撃の起点となっていた。

西武台は、時間帯や選手の組み合わせによって、いくつかのフォーメーションを用いていた。準決勝では、1-4-3-1-2でスタートし、後半になると守備時は1-4-4-2、攻撃時はCMFがCB間に入り、1-3-5-2の形でビルドアップする可変システムや終盤では1-3-4-3を採用していた。全体的にたくましさがあり、チーム全体でボールに対してプレッシャーをかけていた。攻撃は、CMF 武笠が組み立ての中心、FW 岡がターゲット、FW 和田が得点に絡むプレーを見せる。レフティーの左SB 川口のキックは素晴らしく、前線へのフィードやクロスでチャンスを作ったり、セットプレーのキックでも得点に繋がるボールを供給したりした。

成徳深谷も中央攻撃を狙いとした1-4-3-1-2でスタートし、サイド攻撃に重きを置く1-4-2-3-1を用いたり、ウイングバックのサイド攻撃と中央の厚みを利用する攻撃の併用で1-3-4-2-1を用いたりしていた。選手の組み合わせとゲーム状況に応じて使い分けているようだった。CB 増子は空中戦に強く相手ゴールキックをほとんど競り勝っていた。FW 平井はポストプレーが得意な選手で攻撃の起点となり味方が押し上がる時間を作り出していた。これにより、全体がコンパクトにポジションを取ることができ攻撃から守備の局面の切り替えが特に早く、相手の自由を奪っていた。左SB 鈴木は左足のキックの質が高いだけでなく、ロングスローでもチャンスを作っていた。このロングスローを利用した攻撃は、チームとしてよく練られた戦術が用意されていた。

優勝した昌平は、プリンス関東1部首位が納得のチームである。全国的にも知名度の高い選手が並び、盤石の試合運びをしていた。1-4-2-3-1が基本フォーメーション。右MF 荒井は背後へのアクションが秀逸で、タイミングが合えば相手DFの背後を攻略し、相手が下がりすぎれば空いたスペースに動き直してボールを受ける。このストロングポイントチームとして共有して全体がプレーしていたことが素晴らしい。MF 荒井へのパスコースを作ったり、おとりにして他の選手がパスを受けたりしていた。DF 津久井とCMF 土谷からの配給が特に効果的だった。二人とも視野が広く、観るタイミングと場所が適切であった。MF 篠田はキープ力と突破力に長けており、中央でもサイドでも攻撃の起点を作ることができ、得点機の演出だけでなく苦しい時間帯からチームを解放することもできる好選手である。DF 津久井はクレバーかつ対人に強い選手で、数的不利のカウンターアタックも1人で相手の攻撃の芽を摘んでいた。今大会では、FW 小田が欠場する中で、FW 鄭、上野や特に決勝で献身的なプレーで輝きを見せた平らが躍動した。DF 石川も準決勝と決勝を欠場したがDF 今井は準決勝で決勝ゴールを決める活躍をした。選手層の厚いチームであるのでタフなスケジュールの本大会での期待が高まる。

おわりに

敗退したチームは次の目標に向かって、日常をどのように充実させていくか、選手も指導者も関係者も、日々を楽しんで欲しい。

埼玉県代表の昌平高校には本大会で持てる力を十分に発揮し、素晴らしいサッカーを全国に披露してほしいと願う。コロナの感染も再拡大している中で、コンディションをコントロールして大会に臨んでもらいたい。